

講談社

日本文學

全集

3

政治小説集

日本現代文學全集・講談社版

3

政治小説集

編 集

伊	藤	整
龜	井 勝 一	郎
中	村 光	夫
平	野	謙
山	本 健	吉

日本現代文學全集

3

政治小説集

編集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



昭和40年12月19日 第1刷

昭和41年2月12日 第2刷

定價 500圓

© KODANSHA 1965

著

者

矢野龍溪
とうかいさん
すえひろ
末廣藤
すなどう
南翠

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3-19
電話東京(942) 1111 (大代表)
振替東京 3930

印刷製本
寫版製本
眞印
製函
背皮
表紙クロス
繪用紙
本文用紙
函貼用紙
見返し用紙
講用紙

大日本印刷株式會社
株式會社 興陽社
大製株式會社
株式會社 岡山紙器所
株式會社 第一紙藝社
株式會社 石井
日本クロス工業株式會社
日本加工製紙株式會社
本州製紙株式會社
安倍川工業株式會社
三菱製紙株式會社
崎崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

政治小説集 目次

卷頭寫眞

矢野龍溪篇

齊武名士經國美談 前篇……………五

東海散士篇

佳人之奇遇……………八

末廣鐵腸篇

政治小説雪中梅……………三五

須藤南翠篇

一顰一笑新粧之佳人……………三九

作品解説·····	中村光夫	三五
政治小説入門·····	柳田泉	四〇
年譜·····		四九
参考文献·····		四七

矢野龍溪篇

高松

年少誤懷天下憂
時之至斯才難起
生才業何所成枉向
燈前臨少艾

題經中貞社後

先因之步世後一歲七年
甲申初生

龍溪子人



齊武經國美談 前篇

天荊地棘可泣可哭可驚可憤者盡輾一身當此青智力足有爲者不巧趨善避則奮勵激昂卒共禦益於時唯英雄志士仁人君子則不然確乎執捨生取義之操鞠躬盡瘁盡人事而待天命其堅忍不撓之精神百世之下聞者可興起矣巴比陀齊武一學士抱濟世之才而遭屯遭之時不鹹初念於困厄流離之餘終克奏回復之偉績達可笑可歌可歡可娛之境而猶遜一步不極顯榮真英雄志士也歟眞仁人君子也歟我友矢野文雄君深有所感湊合舊史編成一書於巴氏行爲撫撫無遺其用意可謂周且到矣後之遭若茲變者能養若茲精神不避不激盡人事而待天命則可也

明治十六年二月中五

江戸 砲庵 栗本鯉 撰

棋溪 日高秩父 書

訂正經國美談自序

根幹を正史に取り、枝葉を文るに小説體を以てす、是れ本書の特色

にして、他の普通小説と、聊か其撰を異す所以なり、抑も歐米今日の文明は、其遠源を古希臘と羅馬とに發す、故に古希臘の文物興亡を知る、亦た必要の事に屬す、世人、若し雅典の衰替と、麻斯頓の勃興との中間時代に於る、希臘史を究めんと欲せば、本書を繙て裨益する所なくんばあらず、頃日書肆、舊版を改むるに際し、來て訂正を乞ふ、本書の特質上記する如きを以て、之を捨るに忍びず、乃ち舊版の漢字、送假名の誤謬最も甚しき者等を改め、其請に従ふ、

明治四十年九月

矢野龍溪識

齊武經國美談自序

明治十五年、春夏の交、予疾あり、臥蓐連旬、無聊に勝へず、眼史冊に倦む、即ち和漢の小説を求て之を讀む、諸書、脚色陳套、語氣卑下にして、人意に満たざるを憾む、後ち數日、手に任せて枕上の書を取り之を讀む、卷中、會ま希臘、齊武勃興の事迹を記す、其事奇異、粉裝を加へずして人を悦ばしむるに足る、因て之を譯述せんことを思ふ、即ち諸家の希臘史を索む、其書、甚だ稀なり、學校用の小冊子の外、唯僅に兩三部を得るのみ、ブリュタルチ或はセノホン等の如き希臘古史家の遺書にして、當世に存在し、英譯に係る者に至ては、絶て之を得ること能はざりき、且つ史家が齊武の事を記するや、多くは其の大體に止て、當時の顛末を詳記する者少く、人をして模糊雲烟を隔つるの想ひあらしむ、是に於てか、始めて其の欠漏を補述し、戯れに小説體を學ばんと欲するの念を生じたり、然れども、予の意、本と正史を記するに在るが故に、尋常小説の如く、擅に實事を變更し、正邪善惡を顛倒するが如きを爲さず、唯實

事中に於て、少しく潤色を施すのみ、是を以て、腹稿早く成り、之を筆せんと欲せしが、世事忙匆にして、未だ著作に従事するに遑あらざりしなり

是歲六月、予、京攝の間に遊ぶ、京師は靜閑の勝地に富むを以て、發するに臨み、數部の希臘史を携ふ、蓋し閑地に就きて、之を譯述せんと欲するなり、然るに、予が大坂に達せし以來、同志の士人、來往する者絶えず、送迎應接、日に忙を加ふ、且つ文書の四方より沓至するあり、之に應答する所なかる可からず、客中の間忙、大に豫期する所に違ふ、故に偶々間を得て京師に遊ぶも、淹留僅かに數日、山川の勝、尙ほ且つ探遊するを得ず、又何ぞ著作に遑あらんや、後ち幾も無くして東歸し、此行、遂に初志を果すこと能はざりき、爾後も亦た南船北馬、東奔西走、曾て著作に遑なく、是書腹稿の如きも、亦た已に十の五六を亡失せり、唯原書に就きて、回想尋思すれば、僅に其の緒を得るのみ、久ふして遂に亡失に歸せんことを憾み、其大略を敘記せんことを思ふ

報知社員佐藤藏太郎氏は同郷の人なり、小説を好み敘事に長ず、予乃間を以て是書の大意を演述し、氏をして毎夜、其聞く所を略記せしむ、是歲第十一月中旬、業を卒ふ、然れども予は當時、近縣に出遊すること多く、躬ら事に是に従ふこと能はざりしなり、然るに第十二月に至り、不幸にして報知新聞停止の事あり、又當時歲晩にして、四方の招聘を絶ち、少しく身心の間なるを覺ふ、乃ち一切、客を謝し、屏居して著作に耽る、當時、予の右腕に疾あり、親ら筆管を執るに勝へず、因て口づから文章を述ぶ、佐藤氏傍に在り、且つ聽き且つ記し、漸にして積て卷を成す、是月下旬、新聞解停の前二日稍く成る、然れども本と口述筆記に成りしものなるが故に、同音異義の字を用ふる少からず、時に予の患部も亦た方に愈ゆ、乃ち手自ら校閲洗刷し、字句を修正す、改作する所極めて多し、延て十六

年第一月中旬に至る、卷中、意に滿たざるの字句、隨て更むれば隨て生ず、自ら笑て謂ふ、無用么麼の冊子、何ぞ力を費すに足らん、乃ち之を印刷に附す、嗚呼一部の戲著、予が數句の思を費す、閑文字を作るの嘲りを免れざるを知るなり

抑々是書の編成、斯く速なるを得たるは、皆筆記者の力にして、佐藤氏の勞、實に大なりと云ふべし、予は深く氏に謝す、又氏に次で力を是書に盡せしは、畫工龜井至一氏にして、卷中の畫圖、人物の服裝家屋より戎器什物に至るまで、勉めて希臘古代の有様を摸したり、然れども摸倣すべき古圖を得るに難く、同氏の困苦は實に大なりき、予も亦た氏をして、一々古圖に據らしめんと欲せしが故に、少しも古圖に違ふことを許さず、故に氏は圖中一器の小、一物の微と雖も、亦た之れを苟せず、必ず圖中より得來らんことを勉めたり、其の筆力の之が爲に多少の硬澁を生じたるを知る、若し氏をして其意匠を專にし、其筆力を自由ならしめば、其妙豈特に斯の如きに止らんや

世人動もすれば輒ち曰ふ、稗史小説も亦世道に補ひありと、蓋し過言のみ、若し夫れ眞理正道を説く者、世間自ら其書あり何ぞ稗史小説に待たん、唯身自ら遭ひ易からざるの別天地を作爲し、卷を開くの人をして、苦樂の夢境に遊ばしむるもの、是れ則ち稗史小説の本色のみ、故に稗史小説の世に於けるは、音樂畫圖の諸美術と一般、尋常遊戲の具に過ぎざるのみ、是書を讀む者、亦た之を遊戲具をもて視る可なり、唯其大體骨子は則ち正史實蹟なるを記せしのみ

明治十六年二月識於報知社樓上

龍溪學人

凡例

一此書は希臘の正史に著明なる實事を諸書より纂譯して組立てたるものにて其の大體骨子は全く正史なり

一著者が此書を編むや本と正史中の實事のみを纂譯するの心組なりしに書中の事柄は遠き古代の事にして諸書を搜索するも斷續して詳ならざる所あり因て之を補述し人情滑稽を加て小説體と爲すに至れり然れども本と正史實事を専ら記載するの本意なるが故に毫も正史の實事に悖らざるを勉めたり唯殘忍に過ぐるが如き箇條は一二の實事を没したることなきにあらず例へば「民政回復の時に於て有志者の爲に殺されたる奸人及び獄吏の血を嘗めし婦人ありし」一事の如きは正史に記載する所の實事にして奸黨虐政を表するの用を爲すものなりと雖も其所行の人情に近からざるが爲に此書には之を省て記載せざるの類なり其他殺戮の實事を捕縛に止むるものも尠からず唯殘忍の事柄に非ずして實事を更めたるは事平ぐの後巴氏が總統官を辭するの一事なり回復の後人民の爲に推撰せられて巴氏が總統官に上りしは實事なれども著者微意の在る有て此一大實事を變じたり此外は正史實事に據らざるの箇條なし一讀者をして小説を讀むの愉快を得ると同時に正史を讀むの功能を得せしめ且つ是書の全く正史に據るを知らしめんが爲に正史中の實事には一々符號を付して之を表示せり則ち註に（イ。或はロ。の一節は某氏の希臘史）とあるはイ。或はロ。の假字を以て前後を挿む間の事柄は正史なるを示すものなりハ。ニ。ホ。等の假字を以て挿むものも亦た同じ又（以上一節は某氏の某史）とあるは其全節の正史なるを示す又（何々の事は某氏の

某史）とあるは其の一事の正史なるを示すものなり

一此書を纂譯せる原書中にて其の重なるものを知らしめんが爲に卷頭に引用書目を列記したり

一書中の里數は其實原書にて英里なれども短縮に過ぐるが故に著者は之を我邦の里程と爲せり讀者も亦た之を日本里程と假定せよ又時として原書の儘に何「ヒート」と記するものあり此れ我邦の尺度に改算して記載すれば端數を生じて讀者に煩はしからんことを恐れてなり

一書中の地理は成るべく眞の地理に據れり然れども希臘の精細なる密圖を得ること能はずして著者の困難せること尠からず例へば齊武と雅典との間に在て幽美の海に注ぐ河（則ち書中にて巴氏陷没せる河）の如きは諸種の地圖を求むれども其名を記せるものなし因て已むことを得ず其近傍なる波寧山の名を假り來て之を波寧と名くるに至れり其他も成るべくは眞の地理に因ることを勉めたれども實は山川の模様も古今少しく其趣を異にすることなきにあらず例へば有名なるルテルモバイリーの地形の如きは古圖及び古史に據れば一方は斷崖千尺一方は大海にて其路僅に數騎を馳するに足る故に齊國の志士三百の孤軍を以て百萬の大兵を防ぐを試みたりと書すれども現時の地勢を按ずれば山崩れ海退き今は山海の間に里餘の田野を生じたり幾千年を隔つれば桑滄の變遷は免れざる所なれば固より斯の如きの異同あるべし然らば假令ひ著者が今日の精密なる地圖を按じて之を事實に引き當るとも尙ほ多少の相違を生ずるを免れず然りながら力の及ばん限りは地圖と相悖らざるを勉めたり

一書中の重なる人物の姓名は無論總て正史に據れり卷尾の正史摘節を參觀すべし又其他正史に見えざる姓名は其人物の善

惡に従ひ善人の姓名は希臘史中の他の時代の善人の姓名を假用し惡人の姓名も亦た他の時代の惡人の姓名を假用せり

一書中の時代には未だ今日の如き日用便利の器物なきが爲に著者の困難せること多し例へば時計の如きは是れなり今日の小説に於て懷中時計の用を爲すは夥きことなれども此書にては之を用ふること能はず唯僅に時刻を計る水漏或は沙漏ある位なるべければ卷中の時刻を記するに夜幾更とせる處あり或は何時とせる處もあり然れども多くは今日の二十四時を用ふ

一此時代の雅典の裁判には罪人に辯護人を附するを記するものあり然れども此書には之を省く

一書中諸名士が宴席に奸黨を襲ふ事は殘酷に過ぐるが如き觀あるを以て一回は之を變更せんと欲したれども此事は正史の事實中にて最も著明なるものなるに今強て之を變更すれば全く正史の大體に違ふを恐れ其儘に之を組立てたり是れ此書が正史を骨子と爲すに因る然れども殺戮の實事を更めて尙ほ之を捕縛に止めたり

一今や我邦の文體に一定の體裁なきが故に著者は此書を草するに當て隨意自由に諸種の文體を用ゐたり然れども戯れに従來の小説體の語氣を學びし處多ければ讀者之を察せよ例へば「斯る田舎の片山里に」とあるを「斯る、でんしや、の、へんさんり、に」と讀まれては迷惑なり「斯る、あなか、の、かたやまざと、に」と讀むべし又「獨り此家を立去りけり」とあるを「獨り、このいへを立去りけり」と讀むべからず「獨りこのやを立去りけり」と讀むべし總て大和詞様に讀めば間違ひなく句調よし此書の文體は誰氏の文體にもあらず著者體の文章と評せらるゝも可也凡て書冊は其趣向と文章とにて愉快を與ふるものなれども此書は専ら趣工に注意して深く

辭を修するに及ばず匆々印刷に附したれば定めて讀者に多少の不満足を與ふるならん是れ蓋し著者が世務に忙くして閑文字を修するに遑あらざるに因るのみ

引用書目

- 一具朗杜 (George Grote) 氏著希臘史
右千八百六十九年出版
十二册
- 一慈兒禮 (John Gillies) 氏著希臘史
右千八百二十年出版
八册
- 一志耳和兒 (Connop Thirlwall) 氏著希臘史
右千八百三十五年出版
八册
- 一格具 (George W. Cox) 氏希臘及び羅馬の古代
右原書日耳曼千八百七十六年出版
一册
- 一須密 (William Smith) 氏希臘史
右千八百七十年出版
一册
- 一防是新 (Bojesen) 氏著希臘史
右千八百七十一年出版
一册
- 一遇杜律 (Goodrich) 氏著希臘史
右千八百七十七年出版
一册
- 一知杜禮 (Tyler) 氏著萬國史
右千八百六十六年出版
一册

卷中の重なる人名、地名の英字

(イ)より(ホ)に至る	
一 威波能 (Epaminondas)	一 以斯明 (Ismenias)
法斯須 (Phocis)	
(ク)より(カ)に至る	
一 巴比陀 (Pelopidas)	邊禮仁 (Pherenikis)
加倫 (Charon)	加里頓 (Chiron)
カドシー (Cadmea)	
(タ)より(ケ)に至る	
一 多莫俱 (Damocheidas)	令濫知 (Leonidas)
圭皮度 (Kephisodorus)	
(コ)より(テ)に至る	
一 格德 (Codrus)	吳兒陀 (Gorgidas)
テセス (Theses)	
(ア)より(ヒ)に至る	
一 雅典 (Athens)	亞留知 (Archias)
阿世刺 (Agesilaus)	安度具 (Androkleidas)
瑪留 (Mello)	皮貞 (Hypates)
比律布 (Philippus)	比留利 (Phylidas)
西方善 (Hippostenidas)	
(セ)より(ス)に至る	
一 勢應本 (Theopompus)	齊武 (Thebes)
斯波多 (Sparta)	士良武 (Thrasylbulus)

餘は數多ければ之を略す。

第一回 賢王賢士済民の功業を立つ
一群の童子等史談に感激す

斜陽西嶺に傾き、今日の課程も終りにや、衆多の兒童は皆々歸り去りける跡に、尙ほ残り留りしは、年の頃十六歳を首らとして十四歳までなる七八名の兒童なり、此の一群の兒童に向ひ、教師と見えて其の齡六十餘り鬚眉共に雪白なる老翁が、覺堂の隅に飾付けたる一個の偶像を指して語りけるは、

御身等の聞きたしと云ふは、近頃修覆せし此の像の事なるか、抑々此は格德と云へる古代の賢王の像にして、此王の事蹟は語るも長きことなれば、唯其の大略を説き聞かす可し、

今を距ること八百年以前、我が隣國雅典が猶ほ未だ建國に遠からざりし頃、故ありて其の敵國なるラセデーモンの斯波多と戰を開きしに、敵國の軍威強大にして味方は連戰連敗し、遂に雅典の國都に近き處まで攻めつめられ、今は唯最後の一戰にて其存亡を決すべき危急の場合とぞなりける、此の時雅典に王たりしは即ち此の像なる格德にてありけるが、王は性質善良の人にして、斯る危急の場合に臨み、如何にもして其國の人民に獨立を保たしめんと、獨り心膽を碎きける中に、不圖人民を濟ふべき奇異の一計を見出しけり、茲に希臘の北部なるホウシスの地にバルナツシユスと云へる深山ありて、其半腹なるデルヒーの町に古來より希臘人民の深く尊信畏敬する一字の神廟あり、此處に祭れるは阿保留と稱する有名の尊神にして美術、音楽、醫藥の事を掌管し、又未來の事變を洞察するの慧眼ありとて、諸國の人民之を尊信せざるものなし、又其の殿堂は人里遠き森林の中に在て甚だ幽邃なる地なるが、諸國ともに大事ある時は、先づ人を此の地に遣し、其の吉凶を此の神廟に占て豫め禍福を定め之を舉行せざるものなし、然

れば此の度敵國斯波多が大軍を擧げて攻め來る時も、亦た古例に従て阿保留の神廟に先づ其の勝敗を占はしめしに、「雅典の王を殺さずして戰はゞ大に勝つ可し」との神託ありけるが、果して今までは連戰連勝の勢にて攻め進みたり、然るに今雅典の賢王格德は如何にしてか探り出しけん、敵軍の秘し置きたる此の神占を聞き得しかば、獨り熟らく思ふやう「我身の民に君たるは榮華を求むる爲めならず民の利益を謀るが爲めなり、今聞得たる神託が若し實事にてあらんには、我身一人の命をだに擲つときは敵兵は其の神占に違背して此末勝利なかるべし、然るときには我一人の身を捨て、無數の國民を救ひ得べし、雅典一國の獨立に比較すれば我身は羽毛より尙ほ輕し、今人民の危急を救ふは是に勝れる手段はあらじ」と遂に戰死を決しけるが、若し尋常の戰を爲さんには、味方の兵士等我が身を護衛なし、容易に戰死せしめざるべし、然ればとて又此の意を告げなば、我身を留めて聽すまじ、寧ろ一人單身にて敵陣に紛れ入り討取らるゝこそ上策ならんと、一たび思ひ定めし上は、片時も躊躇すること能はず、其の夜密かに味方の軍を脱し、賤しき者の服を着け、唯一人にて敵陣に切り入りしが、誰れかは之を雅典王と知るべき、敵陣にては、スハ、狼藉者の來りしぞと忽ち大勢にて取圍み、難なく之を打取りける、斯くと知らねば、其の夜は其の儘に打棄て置きしが、翌朝に至り其の者の携帶せる武器を視るに皆金銀を以て裝飾し、總ての有様尋常ならねば、皆々之を怪しむ中に、重立ちたる斯波多の將校等も其の傍に打寄て能く能く死骸を檢視れば、何ぞ圖らん這是れ雅典の賢王と聞えたる格德にてありければ、其の驚き云はん方なく、此の事早くも全軍に聞えけるに、深くも神託を信ずる迷ひ深き此の時代のことなれば、兵士等は大に失望し、最早や敵の國王を殺して神託に違ふ上からは、此の末とても勝利覺束なし

と、軍中大に沮喪の色を形はし、又重立ちたる將校其他の心ある人々は、斯くまで敵國の君王が國を愛して其の身を棄る程ならば、其の人民が獨立の爲めに死戰を爲すの鋒は恐る可きものならんとて皆々震ひ怖れる、人々の智慧に因て思ふところは異なれども、斯波多の將卒は皆一同に勇氣を損し、賢王格德が其の身を棄てたる貴き舉動をば、敵ながらも感ぜぬ者こそなかりけれ、又雅典の軍中には頻に國王の行衛を捜し索る折から、此の注進のありしより士氣大に振ひ起り、一人にても生き存へてあらん限りは、獨立の爲に抗戰すべしと益々勇氣を増したりける、斯波多の軍中には、之に引き換て兵氣何となく沮喪しければ、其の將校等は禮を厚ふして格德王の遺骸を雅典の人民に遣り歸し、遂に大軍を引き揚て其の本國へぞ歸りける、是に於て雅典人民は終に滅亡の危急を免れしが、爾來次第に國富み榮え、年を経るに隨て、列國中に於て富強一二の地位に立ち、一回は其の盟主とまでに仰がるゝに至りしは、皆な是れ此の格德王の賜と云ふも可なり、右は他國の事ながら、賢王が人民の爲めに命を捨てし美德を慕ひ、我が政府に立たん者も亦た斯くあれかしと思ふより、此の像をも斯くは講堂に飾り付くるぞかし、(格德王の一節は志氏週氏須氏の希臘史に據る)

又御身等の尋ぬる此の頃新たに飾付けたる此の像は、スラウリウス^{スラウリウス}へる雅典の名士なり、御身等の知らるゝ如く、同國は數百年このかた共和政治の民政國なりしが、ペロポンネシャの戰より以後は、國勢の次第に衰ふるに乘じ、今を距ること二十年前、同國の政柄を執りし人々の中に不正の黨派現れて、其の數凡そ三十餘名、相結んで舊來の民政を廢絶し、己等を援助する斯波多の政體に倣ひ、之を寡人專制の政體と改め、此にても舊來の民政を企望する者あれば忽ち之を嚴刑に處し、又財産の豐なる者を見れば事

に托して之を豪奪し、暴惡無道に至らざる所なかりける故に、歴史家は此の時代を三十奸黨（ソルチー、タイラント）專制の時代と名づけ、雅典人民が最も不幸の時代と爲せり、又三十奸黨が政柄を專にせし僅か八ヶ月の其の間に、無實の冤刑に陥りたる人民の數は、夫のペロポネシアの戰が最も劇しかりける十年間に戰歿せる人民の數よりも、却て多き程なりしと云ひ傳ふ、然るが故に當時雅典の有志者は、皆な本國を脱走して難を其の近國なる慕智亞或は閑命に避け、我が邦などへも逃れ來りし者多し、斯れば本國に於ては三十奸黨の威勢益々熾なりけるが、天尙ほ未だ雅典の人民を遣てざるにや、有志者の中に一個の偉人ありて其の名を士良武と云ふ、此の人は年猶ほ壯しと雖ども慷慨にして大節あり、常に人民を濟ふを以て其の志と爲せしが、今其の國人が斯る塗炭の苦みを見るより、何とぞ舊來の民政を回復せんと、奔走艱難して諸國に流落し、我が邦へも暫時其の身を匿せし事あり、其の時三十奸黨等は、斯波多の國威を假て、士良武其他の有志者を逮捕せん事を我が國に脅迫せしかども、正人の不幸を憫み濟民の事業を貴むの志ある吾邦の人民は、斯る名士を捕るに忍びずとて、遂に其の脅迫に抵抗したりしなり、斯て士良武は晝夜回復の計略を旋らせしが、其の熱心止み難く、遂に僅々七十餘名の同志と共に事を擧げて、雅典の國境なるピリユーの小砦を不意に襲撃して之を陥れ、先づ此の處を根據としたるに、之を聞傳ふる有志者等は、近隣諸國より皆な此堡に馳せ集りしかば、暫時の間に人數を増加し七百餘人に上りけり、三十奸黨は之を聞て大に驚き、直に一隊の軍馬を率て之を攻撃したるが、唯一戰の下に有志者の爲めに追崩されたり、此の捷聞一たび四方に達するや、回復に熱心なる人民は益々奮起し、士良武等の旗下に來り屬する者陸續として其の數を知らず、忽ち意外の大軍となりけり、士良武は直に之

を率ゐ、進て雅典の都に程遠からぬ比留ビリュの都城まで攻め行きけり、然るに三十奸黨等は之を支へんとて、大軍を以て途中に要せしに、有志者等は再び之を打破て難なく比留の都城を乗取たり、斯く大軍を以て有志者が二里にも足らざる都近くの地に押寄せ來たるに時を得て、雅典の都府なる人民も一齊に起り立ち、終に三十奸黨を捕て之を他國に放逐し、假りに十名の行政官を撰て比留に在る士良武等と回復の協議を爲さしめけり、其の後暫しの間は尙ほ若干の混雜ありしが、遂に再び舊政を回復して今日の民政國となれり士良武は人民の爲に斯の大功業を立たるの名士なれば、我が邦人民の模範ともなるべしとて、新たに此の像をば此の處に飾付けたるなり、二坐の肖像に就き其の大略は斯の如し（士良武の一節は慈氏志氏防氏の希臘史に據る）

と言ひ畢て日影を眺め、御身等の請ひに應ぜんとて思はぬ時間を費したり、委しき事は又こそ語らめ、いざ、歸らんと暇を告て堂の外き面に出行きたり、前きより之を聞き居たりし一群の童子等は、何れも感歎の容子なりしが、或は笑ひを含むが如きもあり、或は慣れるが如きもあり、或は只默然たるもありにける、蓋し笑ひを含む者は、話中の名士が其の功業を成し遂げたるの愉快を喜ぶ者なるべし、又慣るが如き者は、唯今の話中なる人民が辛苦不幸の有様を想像して其餘憤の猶ほ心に残れるなるべし、又默然として沈吟するが如き者は、若し我が身を其の境に處せば如何にすべきか扨と子供心にも案じ煩ふなるべし、此時一群の中にて其の齡最も幼く、可愛き容顏の中に凜然たる氣象あらはれたる一人の童子、先づ發言しけるは、

諸兄は二人の中何れを好むや、余は最も士良武シラウに爲り度く思ふなり、若し我々成人の後に至り、我が國に三十奸黨の如き者あらば、余は身を棄て士良武の如く人民を救ふべし、諸兄も然は思は

ずや、

と云ひけるに、子供心にも義に勇むの性質と見え、他の童子等も一同に、我々も士良武とならんことを願ふなりとぞ答へける、然るに此の時までも始終黙然として深く思案に沈みし如き一人の童子あり、年の頃は十六歳許りにて、此の一群の中にては最も長年の者と思はるゝが、此時徐に朋友に對して、

萬一不幸にして三十奸黨の出ることあらば、我れも士良武となり人民を濟ふの功を立て度く思ふなり、然れども功を立てんと思ふの餘り、我邦に三十奸黨の生ぜんことを願ふの心露ほども起りなば、我々は眞の道に違ふ可し、我々の功業を立てんより寧ろ三十奸黨の我邦に生ぜざるこそ願はしけれ、

と言しかば、其の言葉を道理と思ふが如く見ゆる者もあり、又或は之を道理と知りつゝも功を立てる機會の生ぜんことを望むの情念制し難く見ゆるもありしが、同じく十六歳ばかりにて魯鈍らしき一童子、忽ち大聲にて何の思慮もなきが如く、

功を立んとて國の亂を願ふが道理に違ふ譯ならば、何れの國なりとも奸黨の出る處に赴て其の人民を救はざる可なるべし、我々は國難ある地に移住したく思ふなり、

と事も無げに言ひ出しければ、他の童子等は互に顔を見合せて皆々笑を含みけり、此の一群の童子等は、猶ほ此の史談を評しつゝ、打連れてぞ出て行きける、

抑々此の地は如何なる處ぞ、希臘國齊武の都にいて、此の堂は是れ少年子弟を教育するの覺舎なり、又是の一群の童子中にて、最初に發言せる童子は、其名を巴比陀と云ふ、才略拔群、人品優美にして、後年諸名士と與に、内は齊武の奸黨を芟鋤し、外は齊武の國勢を振興し、遂に齊武をして一たび列國盟主の地位に立たしめたる英雄は、此の少年の事なりける、又其の次に發言せる童子は、其の名

を威波能と云ふ、寛厚深沈にして善く兵を用ひ後年諸名士と與に國勢を擴張して強敵を破り、歴史家をして希臘史中第一流の人物と賞嘆せしむる盛徳の賢士は、此の少年の事なりける、又最後に發言せる童子は、其名を瑪留と云ふ、素朴質直にして義に就くこと流に従ふが如く、死を見ること歸するが如く、武藝絶倫、勇力無比にして、諸有志者と共に國勢を振興せるの一豪傑なり、其の他の童子は勢應本、邊禮仁、彼留利、加倫、圭皮度、多莫俱と云ふ、皆後年國事に奔走して偉功を奏するの名士なり、而して此の一回の譚は、紀元前三百九十四年頃の事にして、今や齊武の國勢を興隆し、之をして希臘列國盟主の地位に立たしめんが爲めに、天更に一群の童子を降して濟民の大業を成さしむ、此の童子等が國に立つるの功業如何は、後回を讀て之を知れ（以上諸名士の功績及び其姓名等は慈氏俱氏の希臘史に據る）

栗本鋤雲云。劈天現出仁人義士。從提起三奇童子。以爲後來許多脚色。文法絕妙。

成島柳北云。筆力活動。使千古英雄長不死矣。

藤田鳴鶴云。開卷先敘老教師演說。述雅興賢君義士愛國殉難之蹟。暗々裏呼起後段齊武國難。

又云。三個童兒。是卷中骨體。其感激之語。發露三人有三樣性格。而語氣自然爲後年三士立功之伏線。

又云。一演說。大有關係於全篇結構極妙。唯末節明示兒童爲何人。是實寫矣。不知使此回全虛寫。作者意如何。

依田學海云。兩段話說。主意全在後段。若把後段話說。劈頭說出來。似補湊牽合。大欠自然趣味。乃兩說無些低昂。是無心談話。故妙。

老教師爲童生說一回話。直歸去便好。若留在堂上。听得童生等言論。不得下爲下甲乙批評。大障礙後回事業。各自有好處。

第二回 希臘列國の形勢

第三回以下に説き起す物語は、紀元前三百八十二年に其の端緒を發したるものなり、今第三回到説き入るの前に於て先づ希臘列國當時の形勢を略説すべし（以下列國の形勢及び齊武の國情は具氏遇氏の希臘史に據る）

抑々希臘は古來許多の小邦分裂割據して相爭ふの國なるが、紀元前三百年の頃に至ても亦た之を統一する者なく、列國相對峙するの模樣なりき、而して列國の中に於て舊來より強國と稱せられ、其の盟主と推さるゝはス波多及び雅典の二國なるが、雅典の政體は年久しき共和政治にして、其の行政部には人民の公撰せる九名の行政官あり、其の立法部には五百名の代議士を以て組成せる公會と人民公會との二種あり、是れ其の政體の主要なり、ス波多の政體は立憲王政にして、其の行政部には二人の國王あり、又世襲なる國老院あり、然して其の司法部には人民より公撰せる數名の彈正官を置き、國王を始めとし百官司の過失を彈劾するの大權を有せしむ、其の立法部には人民の公會あり、然れども此の公會には唯政法を可否するの權力を有する迄にて之を討論するの權能なし、而して又ス波多は質朴勇武を以て其國風とし、最も陸戰に長じたり、之に反して雅典は其の文物を盛にし、其の技術を進め、學術、工藝、美術與に皆列國より文明の模範と仰がれたり、歐洲今日の文明は雅典の文明を傳遺せる者蓋し尠からざるなり、又雅典は船舶を以て海上の貿易を盛にし隨て最も水戰に長ずるの名譽あり、夫の歷史上に有名なるサラミの戰に海軍を以て波斯の大軍を破りしは、西史を繙讀する者の能く知る所なり、然るに榮枯盛衰は邦國の常態と見え、其の文物最も盛なりし有名の政治家ペリクレスの時世も已に過ぎ去り、希臘聖人

の名を得たるソクラテスも已に死去し、是の時紀元前三百八十二年の頃に至ては、雅典の人心漸く浮薄に流れて國勢も亦た次第に衰へ、加ふるにス波多と盟主の地位を爭ひ、歷史上に於てペロポネシヤの戰（紀元前四百三十一年より始め）と號する二十七年間に跨て續きたる殘酷なる戰亂の後に於て、遂にス波多の爲めに壓服せられ、一時の勢威に引きかへて今は只僅に獨立を保つに過ぎず、其の國勢文物の日に衰退するの模様は、恰も夫の一回中天に輝きたるの太陽が今將に地平線下に沈まんと欲するに似たり、又ス波多は希臘二強國の一と稱せられたる雅典を制服して、獨り列國に盟主の威を振ふとも雖も、其の國風又次第に萎靡し、尙ほ僅に勇武朴野の氣質を存するも大に昔日に同じからず、彼の有名なる制法者ライキユルギスが定め置きたる奢侈品を禁止するの法令も今は次第に廢弛し、同氏が貿易商業は人民の利欲心を盛長して亡國の端緒を開くべしとて、人民の貿易に不便を與ふるが爲めに、其媒介物たる通用貨は唯鐵錢のみを用ひしめ、鐵錢の外は一切金銀を用ゆることを禁じたりし法令も、今は早や全く廢れて、金銀を用ゆるに至りし一事にて、其餘の百事が總て昔日のス波多にあらざるを知るに足るべし、且つ立憲王政の治體も已に腐敗して、今は寡人專制の政と變ずるに至れり、故に三百八十二年の頃に至ては、其の外は甚だ盛なるが如きも、内部に於ては國力次第に衰耗し、且つ同盟列國中にも其の亡狀を憤る者多く、暗に離心せんと欲するの勢あり、故に二強國の一なるス波多が此頃の模様を評すれば、恰も強壯なりし男子が力老て老翁と爲らんと欲するものゝ如く、又二強國の一なりし雅典は、絶世の佳人が色衰て老婆と爲らんと欲する者に似たり、二國の勢力は斯く衰頽に傾きたるの時に於て、希臘の北部に一國あり、其國都を齊武と云ふ、齊武は即ち幕智亞州に在り（地圖を見るべし）而して齊武の政體は舊來より共和の民政にて、其の制度は多く雅典に倣

希臘列國之圖

